

令和 2 年 5 月 31 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02565

研究課題名（和文）世界システムにおけるロシアの主体形成：新経済批評から見るロシア19世紀後半の文学

研究課題名（英文）The Formation of Russian Subjectivity in the World-system: Late 19th Century Russian Literature in the Light of New Economic Criticism

研究代表者

平松 潤奈（Hiramatsu, Junna）

金沢大学・外国語教育系・准教授

研究者番号：60600814

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代化が本格化する19世紀後半のロシアの文学（特にドストエフスキー作品）を、贈与交換論や近代世界システム論などの経済的観点から考察するものである。この時代、ロシア社会に近代的な非人格的社会制度（貨幣経済など、神への信仰や専制君主への服従や隣人愛などの人格的要素なしに稼働する制度）がより体系的に導入されるが、近代世界システムの周縁に位置する社会では、これらの制度の導入は逆説的に、人格的關係や神への信仰を強化する。本研究は、文学作品の分析を通してこの論理を追い、当時のロシア社会における人間主体形成と経済問題の關係性や、それが文学テキストの芸術形式に及ぼした影響を明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ソ連崩壊から30年を経た現代のロシアは、再び「西側社会」との冷戦關係に突入したように見える。「西欧」と近いが、しばしば西欧に対する敵対性や異質性（専制的政治体制、経済的後進性など）を指摘されるロシアの社会・言説構造の根源はどこにあるのか。この問いに答えるため、近代化が本格化する19世紀後半のロシアの文学や歴史状況の分析を行い、近代世界システムの「周縁」に位置するロシア社会で形成された人間主体のありかたを提示したことに、本研究の学術的・社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examines Russian literature (in particular, Dostoevsky's texts) of the latter half of the 19th century, when Russian society escalated its modernization process. It does so based on economic theories such as gift exchange and world-systems. In this time period, modern impersonal social institutions (monetary economy, for instance) that function without personal elements such as a belief in God, subjection to a monarch, or neighborly love were introduced into Russian society more systematically than previously. However, on the periphery of the modern world-system, the introduction of the new institutions to the country paradoxically strengthened dependence on personal relationships with neighbors and belief in God. This study explores this logic through analyses of literary texts and illuminates the relationships between the economic aspects of Russian society and the formation of human subjectivity, which shaped the artistic form of the literary texts of the time.

研究分野：ロシア文学

キーワード：ロシア文学 新経済批評 贈与交換 近代世界システム ドストエフスキー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究従事者は、本研究開始以前の数年間、ソ連文学に見出される「ソヴィエト的主体」について、経済的観点からの考察を行ってきた(若手研究(B)「ソヴィエト的主体形成における所有と交換:スターリン期の公式文学研究」)。その研究では、資本主義、市場経済、貨幣経済とは異なる経済体制(国家による再分配・指令経済や、共同体内の互酬的な贈与交換関係)が、文学テキストにどのように表象され、またその経済体制がいかなる人間主体モデル構成に関与しているか、という問題を扱った。この研究の過程で、ソ連時代の主体形成の問題を十全に理解するには、同様の観点から革命前のロシア社会の状況(文学、社会、経済など)や主体形成モデルについても考察する必要があると考えられるようになった。革命前のロシアとソ連が置かれていた近代世界システム上の位置取りにはある程度の類似性が認められ(たとえば農奴制と強制収容所という自己植民地化の制度に頼った原料生産国であること)、社会的・文化的言説や主体形成のあり方にも一定の関連性が認められうるだろうと考えたからである。

2. 研究の目的

(1)ソ連崩壊から30年を経た現代のロシアは、再び「西側社会」との冷戦関係に突入したように見える。「西欧」と近いが、しばしば西欧に対する敵対性や異質性(専制的政治体制、経済的後進性など)を指摘されるロシアの社会・言説構造の根源はどこにあるのか。近代化が本格化する19世紀後半の大改革時代(アレクサンドル二世の時代)に遡って当時の文学や歴史状況を分析をすることにより、上記の点の解明に寄与することが、本研究の根底にある目的である。ロシアの「後進性」「敵対性」とみなされる諸側面は、近代世界システムの「周縁」に位置するロシア社会が、近代化の波を受けて講じた対応なのだ、という観点から、文学テキストにおける反西欧近代的な「ロシア的主体」のありかたを析出する。

(2)近年、新経済批評の観点からの文化テキスト分析が増えており19世紀ロシア文学に関しても、ロシア語・英語圏の若手研究者のあいだで、多様なアプローチによる研究が急速に進みつつある。こうした世界の研究動向を踏まえながら独自の観点を打ち出すのが、本研究の研究史の文脈における目的である。本研究は、文学テキストと経済状況を直結させるのではなく、両者のあいだに主体形成やコミュニケーションの論理を注意深く読み取り、あるいは組み立て、新たなロシア文学新経済批評を提示することを目的とする。

3. 研究の方法

文化人類学(贈与交換論)、社会学(N.ルーマンの社会システム論)、歴史学(世界システム論、貨幣史)など、さまざまな学問領域のアプローチを取り入れて、領域横断的な文学テキストの分析を行う。対象とするテキストには、経済や貨幣の問題が多出するドストエフスキーの諸作品を選んだ。

4. 研究成果

(1) 贈与交換と市場交換(金銭贈与と負債の問題)

ドストエフスキー作品における貨幣嫌悪の問題は、従来から論じられている。この問題は通常、キリスト教の根幹をなす贈与交換的な隣人愛の原理が、市場交換、貨幣経済、資本主義の論理の流入によって失われる、という問題として論じられてきた。貨幣は、コミュニケーションの脱情動化を促す媒介物であり、その貨幣がとりもつ冷徹で非人格的な市場の論理によって、贈与交換をとりもつ愛や相互扶助の感情が押し潰される、というのは、近代化途上の社会と人間の運命を物語化する際の典型的なパターンである。本研究(1)は、ドストエフスキー作品が書かれた大改革時代のロシアの貨幣状況を考慮に入れ、贈与交換の問題をより緻密に検討することにより、上記のような構図を再考した。

本研究(1)が着目するのは、ドストエフスキーの実人生でも作品でも繰り返し問題となる、金銭贈与や貸与(負債)のテーマである。大改革の時代、都市部の商品経済化・貨幣経済化が進む一方、国際経済のなかでのロシア経済の脆弱さを背景にして、政府の貨幣政策は失敗、市民のあいだでは貨幣不足が深刻化した。また当時、金融制度改革が始まっていたとはいえ、貨幣不足に対応するための公的な貸付制度や銀行は未発達で、人々がそうした制度・機関からの融資を受けることは容易ではなく、あらゆる階層の多くの市民が、個人の金貸しや、インフォーマルな人間関係に基づく金銭贈与や借金に頼った。

一般に贈与は、人間どうしの感情的結びつきを形成するために、非貨幣的な交換をとおして行われる。だがドストエフスキー作品における贈与では、市場交換のために使われる貨幣の不足を補うために、贈与が貨幣によって行われ、それが感情的・道徳的・人格的混乱(究極的には殺人)を引き起こす。つまり、ドストエフスキーのテキストが語るのは、社会の市場化・貨幣経済化は、贈与交換や感情を失わせるのではなく、贈与や感情の問題を強化する、ということである。さらに彼のテキストでは、本来的な贈与交換であるはずの行為が、貨幣によって行われることで、市場交換(人格の売買)と解釈され、この市場交換と贈与交換のどちらにもなりうる貨幣交換によって、交換の主体は混乱し、論理的に引き裂かれる。

本研究(1)はこのように、ドストエフスキーのテキストにおいて反復される貨幣贈与・貸与のエピソードが、贈与交換と市場交換の双方に関わる交換形態であることを論じた。

(2) 紙幣 = 借用証書、手紙、対話性

さらに本研究(2)は、ドストエフスキー作品に登場する貨幣流通の特徴を考察することで、彼のテキストの特徴とされる「対話性」(M・バフチン)の問題を捉えなおした。

(1)で述べたような、貨幣の贈与・貸与による感情の高まりや混乱が起こる場面では、つねに硬貨ではなく紙幣が現れ、貨幣の受取り手に踏みつけにされたり、燃やされたりする。この紙幣のイメージが偶然の表象ではないことを、本研究は明らかにする。

一般的には、紙幣は硬貨にかわる新しい貨幣形態で、金貨などの実物貨幣との結びつきを失った、文明のヴァーチャル化の産物とされる(J.J. グー)。しかし、負債論を書いたD. グレーバーなどが論じるように、初期文明以来、共同体内部の取引は硬貨ではなく負債を記録するテキストによって行われていたのであり、また近代国家の中央銀行が発行する銀行券も、もともとは、王や皇帝が、銀行家たちに対して出した借用証書である。つまり紙幣とは、本来的には負債を証明する文書(テキスト)なのであり、それが、債権者と債務者の二者間ではなく、第三者にも流通しはじめたときに、紙幣が誕生する。

ドストエフスキーの作品では、この紙幣の起源を想起させる文書の流通が描かれる。たとえば『未成年』では、手紙が脅迫のネタとなり、金銭的価値を帯びはじめる。手紙のテキストが借用証書あるいは紙幣のような役割を果たし始めるといふ現象は、人格的な贈与交換としての手紙のやりとりと、非人格的・匿名的な貨幣交換が、限りなく接近しうることを示している。つまりここでも、市場交換は贈与交換と交錯する。

手紙のやりとりとは、人格的な人間関係の構築方法であり、ドストエフスキーを論じたバフチンの言葉で言えば、「対話的」な関係性の構築方法である。バフチンの「対話性」はしばしば、多様性や自由を言祝ぐ概念とみなされてきた。しかしドストエフスキーにおける手紙のやりとり、人格と人格とのあいだの間主観的な対話関係・贈与関係には、実際にはつねに金銭の問題が干渉しており、対話関係は、金銭的負債関係から生じる。つまり、ドストエフスキー的な対話関係とは、相手を拘束する負債関係なのだと言ええる(バフチンの「対話性」自体、そのような拘束的な二者関係を意図していると考えられる)。そのような金銭の介入する関係は、人格的な言葉・テキストを、いつでも非人格的な金銭へと置き換え、第三者の介入する市場交換の流通にさらしうる。まさにそれゆえにこそ、ドストエフスキーにおいては、人格的対話の可能性と不可能性の問題が前景化され、対話の困難が人格的な感情の爆発をうむ。本研究(2)は、具体的テキスト分析に即して、上記のように、ドストエフスキー作品で語られる交換や貨幣の問題と、彼の文学テキストの芸術的側面に緊密な関連があることを明らかにした。

以上の(1)と(2)について、2つの学会発表(「ドストエフスキーにおける貨幣」; “Debt, Dialogue, and Emotion: Aspects of “Exchange” in Dostoevsky’s Works”)を行った。

(3) 非人格的なシステム信頼、隣人に対する人格的な信頼、神の信仰

19世紀半ばのロシアの大改革が目指したのは、共同体に対して超越的な位置にある準拠点(神や専制君主や領主)への人格的信頼に基づく社会から、社会自体の内部で生み出される非人格的なシステムへの信頼に準拠する近代的・再帰的社会への部分的移行である(N. ルーマンのいうところの、自己準拠社会システムの形成)。こうした近代的な再帰性をもつ社会の構築のため、法、経済、教育などさまざまな分野で改革が試みられた。そうしたシステムの一つとして本研究が着目するのが貨幣制度であるが、当時のロシア政府の貨幣政策(紙幣の価値向上のための金兌換制導入の試み)は破綻し、長期の金不足・物価高騰を招くなど、貨幣制度をいっそう不安定化するものとなった。このように、社会において非人格的な社会システム(超越的準拠点にとってかわる第三者的な審級)に対する垂直的な信頼性が欠如すると、二者のあいだの水平的な人格的信頼関係による補完が必要となる。しかし二者関係は、それをとりもつ確固とした媒介項(第三者)を欠くため、本来的に安定性を書き、破綻しやすいものである。ドストエフスキー作品のなかの貨幣贈与・貸与のエピソードが物語るのは、非人格的な第三者の審級(銀行制度や貨幣制度)への信頼欠如により、二者での人格的・金銭的信頼関係(個人間の負債)への依存が高まり、個人間でのトラブル(たとえば殺人)が生じるという状況である。

このような信頼に関する問題は、人間主体のありかたに大きくかかわる。自己準拠社会における非人格的なシステム信頼は、主体が絶えずそのシステムに組み込まれていることで(たとえば、社会全体による日々の安定的な貨幣使用)、主体内部に内面化され、他者(人間個人)に対して自律的な行動をとりうる主体が形成される。他方、不安定な人格信頼に依存する状況下では、他者に対して自律的な主体が成立しづらい。ドストエフスキーの作品においては、こうした非人格的な第三者の審級への垂直的信頼の欠如、そこから生じる人格的信頼の不安定性をとおして、神やキリストや専制という人格的・超越的な準拠点(隣人のような他者ではない、超越的な外部の人格的他者)の再導入が行われる。本研究は、このように、19世紀ロシアの大改革を、自己準拠的社会システム構築の試みと失敗として意義づけたいうえで、ドストエフスキーにおいて、非人格的社会システムや隣人への人格的信頼の破綻の認識を通して、神への信仰の問題が提起される論理を追った。

(3)について、1つの学会発表(“Unstable Trust: Dostoevsky’s Works in an Age of Economic Transition”)を行った。

(4) 自己植民地化、強制収容所、文化の役割

ヨーロッパ世界の近代化過程のなかで、海外植民地獲得競争に参加できなかった大陸国家ロシアは、自国農民を19世紀半ばまで農奴制下に留めおき、またシベリアを植民地化して自国の囚人を送り込み、強制労働に従事させた。その後成立したソ連国家は、農業集団化や大規模強制収容所網(グラーグ)の形成により、よりいっそう暴力的な不自由労働を、外国人だけでなく自国民に課した。

本研究(4)では、近代世界システムの周縁に位置し、原料輸出国の役割を担うことになったロシア・ソ連の歴史を貫くこの「自己国植民地化」の過程を明らかにし、海外植民地で奴隷に強制労働をさせた近代の西欧諸国や、占領地の外国人に強制労働を課したナチ・ドイツとの違いを論じた。さらに、ソ連で、大量死をもたらした暴力的な経済活動と並行して、それに矛盾するようなイデオロギー教育や文化活動が行われたことも論じ、経済と、政治イデオロギー・文化が一体化した全体主義社会の問題も考察した。

(4)については、二つの書籍(『ロシア文化事典』『ロシア文化 55のキーワード』)で、項目を執筆した。

(5) テロルの記憶と記念碑

近代世界システムにおける周縁的位置取りに起因するロシアの自国植民地化の歴史(4)は、現代ロシア社会にも影響を与えている。国家テロル、グラーグというトラウマ的な過去を、現代ロシア社会がどのように記憶し乗り越えるか、という問題が議論されているのである。この問題を論じたA.エトキントによると、この過去を乗り越えるには、暴力の行使とその被害の詳細を明らかにする必要があるが、ソ連の深い「自己植民地化」の歴史に関しては、迫害と犠牲の境界が曖昧化しており、両者の線引きが難しい。多くの人間が、迫害者と犠牲者の両方になりえたからである。迫害者と犠牲者の線引きの困難がもたらすトラウマの乗り越えの難しさは、グラーグの犠牲者を追悼する記念碑が現代ロシアにおいてきわめて少ないことに現れている(特に、犠牲者と迫害者の線引きが明瞭であったドイツにおける記念碑の多さと比べて)。記念碑とは、トラウマ的過去に関する社会的コンセンサスの結晶化であり、無形のコンセンサスが確固とした石の形になることで、問題に一定の解決がもたらされる。それゆえ、ロシアにおける記念碑の欠如は、コンセンサスのない、記憶の流動状況を物語る。

本研究(5)は、このようなエトキントの議論を翻訳・紹介し、それを踏まえた上で、エトキントのいう記憶の結晶化を、貨幣と同様の物象化機能を果たすものと捉え、記念碑を、記憶にまつわる非人格的で自己準拠的な社会システムと理解した。すなわち、ロシアにおける記念碑の欠如は、まだ人格どうしの対話的關係が継続し、非人格化した記憶の社会システム、第三者の審級が形成されていないことを物語っている。ソ連時代の犠牲の記憶を抱えた地域をめぐって拡大する現代の西欧とロシアの対立(特にウクライナ危機を経た新冷戦状況)は、このような、ロシアにまつわる長期的な歴史のなかで見えていく必要があることを、本研究(5)は明らかにした。

(5)について、1つの共著執筆(『紅い戦争のメモリースケープ:ソ連、中国、ベトナム』)、1つのエッセイ執筆(「ロシアで観光は可能か 未完の喪と記憶資源のゆくえ」)、1つの共同討議報告(「共同討議:歴史をつくりなおす 文化的基盤としてのソ連」)、1つの共同発表(「記念碑はユートピアを記憶できるのか 共産主義建築、その過去・未来・ディストピア」)を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 平松潤奈	4. 巻 7
2. 論文標題 ロシアで観光は可能か 未完の喪と記憶資源のゆくえ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ゲンロン	6. 最初と最後の頁 154-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上田洋子、平松潤奈他	4. 巻 7
2. 論文標題 共同討議：歴史をつくりなおす 文化的基盤としてのソ連	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ゲンロン	6. 最初と最後の頁 44-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Junna Hiramatsu
2. 発表標題 Debt, Dialogue, and Emotion: Aspects of "Exchange" in Dostoevsky's Works
3. 学会等名 Symposium "Towards the Comparative Study of Emotion in Russian, German and Japanese Literature" (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平松潤奈
2. 発表標題 記念碑の存在論 ポスト・ソヴィエト・ロシアのメモリースケープを望んで
3. 学会等名 研究会「社会主義文化における記憶と記念の比較研究」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平松潤奈
2. 発表標題 ドストエフスキーにおける貨幣
3. 学会等名 日本ロシア文学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junna Hiramatsu
2. 発表標題 Unstable Trust: Dostoevsky 's Works in an Age of Economic Transition
3. 学会等名 10th East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 越野剛、平松潤奈他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 250
3. 書名 紅い戦争のメモリースケープ：ソ連、中国、ベトナム	

1. 著者名 沼野充義、平松潤奈他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 886
3. 書名 ロシア文化事典	

1. 著者名 沼野充義、平松潤奈他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 ロシア文化 55のキーワード	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----